住民と学生のワークショップから始まる地域包括ケアと共生の街づくり

八戸市では地域の意見を吸い上げるために住民と学生が参加するワークショップを実施し、そこでの意見を社会福祉法人や障がい者の力を生かす形で実現してきました。

住民と学生のワークショップから始まる地域包括ケアと共生の街づくり

八戸市（高齢福祉課）、生活支援体制整備推進協議会（会長：小柳達也、副会長：豊山信子）

【概要】八戸市（人口約23万人）では、平成27年度に生活支援体制整備研究会（現、生活支援体制整備推進協議会）を設置して、八戸らしい地域のあり方を模索してきた。「既存資源の活用」という方針を掲げ、地域の意見を吸い上げるために住民と学生が参加するワークショップを実施。そこでの意見を、社会福祉法人や障がい者等の力を生かす形で実現してきた。

平成28年度高齢者の生活支援体制の整備に向けた質問紙調査

事業の方向性を検討する資料を得るため、平成28年度に有料老人ホーム等に入居している自立した高齢者等に在宅生活を阻む要因と社会資源の認知度を問うアンケート調査を実施。

主な在宅生活断念理由
- 体調管理が難しくなったら
- 食事の準備が大変になったら
- 買い物が大変になったら

→ 対応する資源（宅配・通販・配食・外出・見守り）の認知率は5%以下が過半数。

→ **八戸の課題は既存資源の活用！**

企画：八戸市　報告書作成：小柳達也（八戸学院大学）

住み慣れた地域での生活を考えるワークショップ

調査で明らかになった八戸固有の課題の周知と地域課題について検討する場としてワークショップを開催することとした（年4回）。広く住民が参加できるようにすると同時に、学生（八戸学院大学・同大学短期大学部）を加えることで場の活性化を図った。

実績と評価
- 平成29年度～30年度で7回実施
- 住民80%、学生95%が「継続すべき」と評価
- 住民「地域について話し合うよいきっかけ」「学生がいると暗い話題で終わらずに済む」「次世代育成になる」
- 学生「地域への関心が強まった」「機会があれば地域の活動に協力したい」「WSなら少数意見も尊重できる」

WSで挙がった主なニーズ
- ごみ捨てが大変
- 集まれるところが欲しい
- 情報の伝え方に工夫が必要
- 高齢者が自身で情報収集できるような支援が必要

実践へ

社会福祉法人・障がい者によるごみ捨て支援

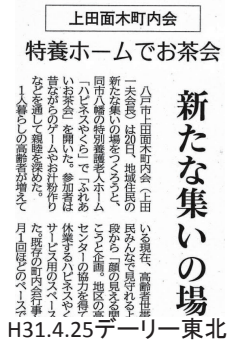
法人職員や利用者（障がい者）が地域の高齢者宅を訪問してゴミ捨てを支援。平成29年度スタート。

実施法人
- 社会福祉法人ぶさん会
- 社会福祉法人東幸会

（その他、支援実績はないが対象者発見次第対応予定の法人あり）

既存資源を活用しつつ、共生社会の実現につながる

障がい福祉施設が代行
地域「互助」
八戸
交差点
H30.6.8東奥日報


上田面木町内会
特養ホームでお茶会
新たな集いの場
H31.4.25デーリー東北

高齢者の社会的居場所づくり（介護予防も兼ねる）

町内会、民生員、社会福祉法人、株式会社等が協働した活動が増えてきている。

実施例
- 地域交流スペースそよ風（社福法人白銀会・ボランティア）
- まんまるファクトリー（集会所・㈱池田介護研究所）
- ふれあいお茶会（町内会・社福法人ファミリー）

地域公益的取組を視野に入れた実践